



ペドロ・メイヤー

イシュトリルコ・エル・グランデ：記憶と彩りの再会

ミラマー・コレクション

## ミラマール・コレクション

60年以上にわたるキャリアを築き、100万点を超えるイメージをアーカイブに収めてきたペドロ・メイヤー。彼は今、絶えず進化し続ける自らの作品群に寄り添う、多様な物語を分かち合うという使命に取り組んでいます。これらの物語は、彼独自の写真家としての眼差しだけでなく、その長いキャリアを通じて情熱を注いできた写真界における活動の本質をも描き出しています。

「ミラマール・コレクション (Miramar Collection)」は、回顧録であり自叙伝でもある全41巻以上の作品集です。1950年代からの写真表現の変遷から、AI (人工知能) をはじめとする最新テクノロジーの導入に至るまで、彼の創作の軌跡を克明に記録しています。

## イシュトリルコ・エル・グランデ: 記憶と彩りの再会

モレロス州の小さな村、イシュトリルコ・エル・グランデ。ここでは毎年9月16日、「シムラクロ・デ・ロス・メコス (メコスたちの模擬戦)」が繰り広げられる。それは1810年の独立戦争当時、先住民たちがスペイン王立軍に抗った壮絶な闘いの記憶を呼び覚ます儀式である。

2022年。パンデミックによる2年間の断絶を経て、写真家ペドロ・メイヤーは、志を同じくする友人たち——リカルド・エスピノサ・オロスコ (REO)、パブロ・オルティス・モナステリオ (モナス)、エンリケ・ビジャセニョール (ビジャ)、そしてリカルド・マルドナド (タピール) ——と共に、この地へと足を踏み入れた。伝統の深淵に触れ、村の人々と心を通わせるための冒険である。

身体的な制約を抱えていたメイヤーは、縦横無尽に飛び回る仲間たちの姿を横目に、ある境地に達する。「一箇所に留まり、そこから世界を切り取る」という写真行為そのものへの深い思索だ。

祭りの主役たちが身に纏う赤い塗料は、かつての蜂起者たちの犠牲の象徴である。しかし、そこに見えるのは単なる過去との繋がりだけではない。文化の融合を象徴する「人種のつぼ (メルティング・ポット)」という概念、そして時代や場所を超えて繰り返される人間共通の営み。その普遍的な価値が、真っ赤に染まった祝祭の中に鮮やかに浮かび上がっている。

### クレジット (LEGALES)

発行元 / 出版基金 ペドロ・メイヤー財団  
(Fundación Pedro Meyer, A.C.)

コレクション統括 マリソル・モリーナ  
(Marisol Molina)

ペドロ・メイヤー・アーカイブ エレナ・ロサレス  
(Elena Rosales)

書籍編集 ペドロ・メイヤー (Pedro Meyer)  
アレクシス・オルティス (Alexis Ortiz)

画像ポストプロダクション ペドロ・メイヤー  
(Pedro Meyer)

アレクシス・オルティス (Alexis Ortiz)  
執筆 ペドロ・メイヤー (Pedro Meyer)

校正・リライト  
テレサ・マルティネス  
(Teresa Martínez)  
フリオ・メイヤー (Julio Meyer)

編集監修  
パブロ・メイヤー (Pablo Meyer)

印刷監修  
マヌエル・ガルシア  
(Manuel García)

エディトリアル・デザイン  
アレクシス・オルティス  
(Alexis Ortiz)  
カルロス・メンドーサ  
(Carlos Mendoza)

制作アシスタント ソフィア・アシェン  
トラップ (Sofía Aschentrupp)

© ペドロ・メイヤー、2026年  
www.pedromeyer.com

禁無断転載・複製 本書の内容 (文章・画像等) の全部または一部を、著作権者およびその相続人の書面による事前の承諾なく、アナログ・デジタルを問わず、いかなる形態や手段、目的においても複製・転写することを禁じます。

編集: メキシコ市、コヨアカン

印刷: メキシコ、オアハカ

ミラマール・コレクション (Colección Miramar)  
ISBN: 978-607-29-7238-4

『イシュトリルコ・エル・グランデ』  
(Ixtililco el Grande)  
ISBN: 979-899-96-7666-5

QRコードより、ドイツ語、フランス語、イタリア語、中国語、日本語の5ヶ国語の翻訳をご覧いただけます。

同志たちへ  
(Dōshi-tachi e)

## イシュトリルコ・エル・グランデ:再起の旅

2022年当時、86歳だった私は、すでに24ヶ月以上もの間、自宅に閉じこもっていた。新型コロナウイルスのパンデミックから身を守るためだ。もともと運動が好きな方ではなかったが、この期間は拍車がかかった。私はよく、冗談にもならない調子でこう言っていたものだ。「もし万が一、運動したいなどという狂気じみた衝動に駆られたら、その誘惑が消え去るまで即座に座り込んでやり過ごすよ」と。だが、歩くことを止めた代償は残酷なまでに明白だった。カメラ機材を担ぐのさえ一苦勞で、自由な移動などおぼつかない状態になっていたのだ。

私は夜型人間である(実際、この文章も午前3時に書いている)。そんな私が、その年の9月16日、朝の6時に迎えを待っていた。やってきたのは、数々の戦場を共にしてきた同志であり、友人、そして写真家仲間たちだ。「イエロー・サブマリン」のような車を操っていたのは、通称「REO」ことリカルド・エスピノサ・オロスコ。同乗していたのは、メフィストフェレスのような風貌で我々の魂を奪おうとする(もっとも、その日は誰よりも私を助けてくれたのだが)古くからの友人パブロ・オルティス・モナステリオ。アザラシのような髭を蓄え、絵に描いたような善意の塊であるエンリケ・ビジャセニョール。そして、この写真旅行の企画者であり、私がどこにあるのか見当もつかなかった「イシュトリルコ・エル・グランデ」へと導いてくれた「タピール」ことリカルド・マルドナドだ。

自宅軟禁に近い状態から抜け出したばかりの、私の惨めな身体状況を察してくれた仲間たちの寛大さに、私はすぐに気づかされた。この勇敢な「共犯者」たちは、私の機材を運び、歩調を合わせて歩き、文字通り腕を貸して支えてくれた。ここで彼らへの連帯と感謝を記すのは、せめてもの礼儀だろう。運動不足で衰えきった自分に驚いたわけではない。悲しいかな、自業自得であることは百も承知だった。しかし、嘆いていても始まらない。幸い思考力は衰えていなかった。私はこの日、どうやって撮影に挑むべきか、頭の中で戦略を練り始めた。

導き出した解決策はいくつかあった。一つは、自由に歩き回れない代わりに、70-200mmの望遠ズームレンズを使うこと。被写体に合わせて激しく動き回る仲間たちを横目に、私は心の中で密かに微笑んでいた。二つ目の策は、超高画素で撮影し、後から視覚的に優れた部分を切り取る(エディットする)という方法だ。

これらの選択肢は、私に「視覚的な機動力」を与えてくれた。私自身が動く代わりに、道具が私の代わりに動いてくれる。私は誰の邪魔にもならない固定された地点から、世界を切り取ることができたのだ。

「イシュトリルコ・エル・グランデ(大きなイシュトリルコ)」という名は、実はそれほど大きくはない。2020年の統計では人口3,495人。多くが米国へ移住したのかは定かではないが、村の規模を想像するためにラスベガスの巨大ホテルと比較してみよう。最大級の『ベネチアン』は7,717室、最も小規模な『エクスカリバー』でさえ4,000室ある。つまり、この村の全住民をこれら一つのホテルに収容しても、まだ宿泊客用の空室が余る計算になる。

「大きい」という言葉は常に相対的なものだ。身体が思うように動かない私にとって、歩かなければならないその空間は、疑いようもなく「広大(グランデ)」に感じられた。

かつてアナログ時代には、撮影した結果を手にするまでに長い時間を要したものだが、今やそれは瞬時に完結する。デジタル時代において、あの「決定的瞬間」もまた、別の意味を持つようになったのだ。

メキシコの独立記念日である9月16日は、国旗を掲げ、地元の文化が創り出した「善と悪」の神話的な戦いを再現する日だ。物語の筋書きは、どこで行われようと似通っている。そこに独自の躍動感を与えるのは、その土地特有の解釈である。

イシュトリルコ・エル・グランデでは、村人も余所者も関係なく、皆が同じ色に塗られた。そうすることで、私たちは「彼らの一部」になったのだ。この「融け合わせる」という欲求は、米国でいう「人種のるつぼ(メルティング・ポット)」という概念に通じるものがある。人間の経験とは、時間と空間を超えた、似通った価値観の永遠の反復にほかならない。16世紀の画家ピーテル・ブリューゲルが描いた風景と、現代メキシコの農村風景の驚くべき類似性が、それを物語っている。

---

## 視点 (Puntos de Vista)

仲間と共に旅をする際、私たち写真家の多くはある好奇心を共有します。それは、「私たちが目にし、肌で感じたあの光景は、それぞれの眼差し(まなざし)を通してどのように切り取られたのだろうか」という問いです。

その答えを追い求めるのは、決して競争心からではありません。表現の世界において競い合いなど無意味だからです。私たちが惹きつけられるのは、多様な視点や独自の感性が重なり合うことで生まれる、豊かで親密な「複眼的な世界」なのです。

---

## リカルド・エスピノサ・オロスコ(RO)

1958年生まれ。1985年より写真家として活動を開始。広告、工業、観光、ホテル、旅行、エディトリアル、ライフスタイル、コーポレートフォトなど、幅広い分野を専門とする。また、1985年から2008年までイベロアメリカーナ大学(Universidad Iberoamericana)にて教鞭を執った。

## リカルド・マルドナド(タピール / EL TAPIR)

1969年生まれ。コミュニケーション学の学士号、および視覚芸術(ビジュアル・アーツ)の修士号を取得。2004年から現在に至るまで、独立系フォトジャーナリストとして数々のメディアに寄稿。その作品は、メキシコ、ドイツ、オーストラリア、チリ、スペインなど、世界各国で17の個展と75のグループ展を通じて発表されている。

---

## パブロ・オルティス・モナステリオ(モナス / MONAS)

1952年生まれ。メキシコ国立自治大学(UNAM)で経済学を、ロンドン・カレッジ・オブ・プリンティングで写真を学ぶ。写真家としての活動に留まらず、雑誌『ルナ・コルネア(Luna Córnea)』の創刊・編集や、主要な展覧会のキュレーション、文化的機関との連携を通じて、メキシコにおける写真文化の普及に多大な貢献を果たしてきた。

写真家としては、主に社会問題や都市をテーマに据えている。母国メキシコの日常生活を切り取り、国家のアイデンティティと文化を深く探求するその作品は、世界各地の美術館やギャラリーで展示されている。また、写真芸術への多面的な寄与により、これまでに数多くの賞を受賞している。

---

## エンリケ・ビジャセニョール(ビジャ / VILLA)

1948年生まれ。メキシコ国立自治大学(UNAM)で建築学を修め、メキシコ自立工科大学(UAM)にてデザインおよび新技術の博士号を取得。ジャーナリズムと写真の分野において40年以上のキャリアを持つ。

10年以上にわたりUNAMで教鞭を執る傍ら、文化プロジェクトの推進・調整役としても尽力。6回にわたるフォトジャーナリズム・ビエンナーレの開催や、エクトル・ガルシア財団ギャラリーの運営、さらには講師としても名を連ねるイベロアメリカ・フォトグラフィー・フォーラムの設立など、集団的な文化活動の発展に寄与している。

---

## 後記、2023年 (COLOFÓN, 2023)

近年の私にとって最も意義深い体験の一つは、イレーネ・バジェホの著書『本を守りぬいた人びと (原題: El infinito en un junco)』を読んだことだ。その体験は実に魅惑的だった。著者の筆致は、まるで古くからの友人と語り合っているかのような親密さに満ちており、数世紀にわたる本の歩みと存在意義についての深い洞察に溢れていた。

「本」という呼び名は数世紀変わらなくとも、その形態は時代とともに劇的に変化してきた。アレクサンドリア図書館に収蔵されていた羊皮紙の巻物から、現代のピクセルで構成されたPDFファイルに至るまで、私たちは文明の変遷とその変容の歴史を目の当たりにしている。

このような技術的变化を歓喜と共に享受できる機会が、私の人生の晩年に訪れた。もちろん、誰もがこの喜びを共有しているわけではないことは承知している。変化に脅威を感じる人々を、私は心から気の毒に思う。彼らが抱く危うさが間違っているからではない。ただ、未来を別の形で捉えようとしなないことは、自分自身を助けることにならないからだ。

私の見方では、完璧なものなど存在しない。どんな提案にも「玉に瑕 (たまにきず)」はあるものだ。古いものであれ新しいものであれ、すべてに長所と限界がある。肝心なのは、社会の進歩を促すための合理的なバランスを見出すことにある。

電子書籍には疑いようのない利点があり、物理的な本にもまた別の良さがある。バジェホは伝統的な本の価値について、見事な論理で多くの理由を提示してくれた。彼女の理路整然とした思考と対話するのは至福のひとつときだった。しかし、思索を巡らせるうちに、どうしても頭から離れない「懸念 (だが、しかし……)」が生じた。

そこで私は、AIツールとして知られるChatGPTを使い、印刷本がデジタル本に対して持つ優位性をさらに深く掘り下げてみた。予想通り、AIが列挙した利点はバジェホが自身のテキストを最新の情報 (ここ数ヶ月の進歩と、それが読み書きの世界にもたらした目に見える影響) で更新したとしても導き出したであろう内容と大差なかった。

ChatGPTのおかげで、私は求めていた回答を得ただけでなく、10ヶ国語以上のテキストを、指定したスタイルで瞬時に翻訳できる可能性も手に入れた。これ自体、目を見張るべき偉業である。そして、私が確認した限り、その翻訳の質は非の打ちどころがない。

この革新的な技術の進歩に圧倒されるあまり、本筋から逸れたくはない。この溢れんばかりの興奮を許してほしい。しかし、私たちは今、誰の想像をも超える歴史的な転換点に立っているのだ。これらを開発した科学者たちでさえ、私たちがどこへ向かっているのかを確信を持って予言することはできない。なぜなら、AIが自らを学習させ、より完全なものへと進化させる段階にすでに突入しているからだ。言い換えれば、今はまだ人間が機械を制御しているが、機械がより高い自律性を持って作動する「技術的特異点 (シンギュラリティ)」は、そう遠くない未来にある。

私自身の電子書籍に関する経験は単なる逸話に過ぎず、私たちをここまで導いてきた無数の事象の中の傍注に過ぎない。しかし、些細なことだからといって重要でないわけではない。私は20年以上にわたり、デジタル形式での書籍出版という冒険を続けてきた。それが冒険であり喜びであると言うのは、とりわけ、思想を伝えるために不可欠だった「印刷に伴う高コスト」というサイクルを打破できたからだ。

かつて、一冊の本が産声を上げ、読者という最終目的地に届くためには、必要な資本を提供してくれる誰かを見つけなければならなかった。大手出版社の担当者によれば、利益の80%はごく一部のベストセラーから生み出さ

れ、大半の本は制作コストすら回収できないという。その結果、作品が出版されるかどうか、あるいはどのように流通するかが決まってしまう。投資に見合わなければ、アイデアは形にならないのだ。

しかし、AIはコンテンツを効率的に生成できる。例えば、GPT-4のような言語モデルは多種多様なテーマについて高品質な文章を作成でき、執筆や編集のプロセスを劇的に容易にする。

翻訳：AIのおかげで機械翻訳の精度は飛躍的に向上した。これにより、本は多言語へ迅速に翻訳され、世界中のより多くの読者に届くようになる。

デザインとレイアウト：AIは伝統的な手法よりも遥かに効率的に装丁や組版を行うことができる。時間の節約だけでなく、可読性や美しさも最適化される。

画像と挿絵：AIアルゴリズムを使えば、魅力的なグラフィックを生成でき、視覚コンテンツの作成が容易になる。

流通と物流：販売データやサプライチェーンの効率的な分析により、在庫の過不足を減らし、流通を最適化できる。

マーケティングとプロモーション：読者の行動やトレンドを分析することで、出版社や著者は潜在的な読者に対してより正確にアプローチできる。

パーソナライズされた推薦：読者の好みを特定し、一人ひとりに合った本を提案することで、読書体験を向上させ、販売を促進する。

セルフパブリッシング(自費出版)：AIは作家、写真家、科学者などの個人出版も容易にした。デジタル形式での出版はより身近なものとなり、コストを抑えるための理想的な解決策となった。

要するに、AIは出版業界のあらゆる側面を根底から変えたのだ。歴史家も美術評論家も——その専門に関わらず——このテーマについて真剣に評価や思索を行ってこなかったため、私はここに、新しい技術を用いた本の制作と流通の可能性を示す3つの事例を紹介したい。ちなみに、これらはすべて20年近く前の出来事である。

一つ目は、メキシコ市歴史地区の「死者の日」をテーマに、数人の仲間と共同制作した本。二つ目も同じく「死者の日」を題材に、ソチミルコの湖沼地帯に焦点を当てた私の写真集である。この一冊を仕上げるのに要した時間は、わずか数時間だった。

三つ目は、写真家ラウル・オルテガの作品集で、オアハカ市役所の要請で印刷されたものだ。5,000部が刷られたが、数ヶ月経っても売れたのはわずか300部ほどだった。この乏しい販売数は、素晴らしい写真が収められた質の高い一冊に対して、正当な評価とは言えなかった。そこで私は彼に、作品をPDF化し、私が以前立ち上げた世界的なプラットフォーム「zonezero.com」で1週間無料ダウンロード公開することを提案した。オルテガは同意し、結果は予想を遥かに上回るものとなった。その1週間で1万5000人が本をダウンロードし、彼の作品を楽しんだのだ。電子流通は彼に直接的な収入をもたらさなかったが、印刷本でもそれは同じだったはずだ。代わりに、彼の作品は圧倒的に広い観客に知れ渡ることになり、この解決策は非常に幸運な結果をもたらした。

これら全ての経験が物語るのは、資材コストの高騰——それは今後さらに進むだろう——に悩まされる印刷本が、電子メディアとその流通構造に対抗するのは困難だということだ。おそらく、印刷本は本を「芸術品」とみなすコレクター向けの特定のニッチな市場、あるいはデジタルという選択肢の海の中で、アナログ時代を懐かしむ人々のための「フェティシズムの対象」へと変化していくのではないだろうか。

個人的には、社会は特定のタイトルに対して「ハイブリッドな解決策」に適応していくと考えている。アイデアはデジタル形式で自由かつ安価に循環し、一方で一部の作品はコレクターのために、ごく少数の豪華本として存在し続ける。

これは映画の世界で起きたことと似ている。映画館という上映空間は存続しているが、ブロックバスターのようなビデオレンタル業は、今や莫大な収益を上げるストリーミング・プラットフォームに完全に取って代わられた。こうして、芸術表現を享受するための選択肢は、絶えず形を変え続けていくのである。

---

ここに掲げる二つのイメージは、ペドロ・メイヤーがカメラを一切使わず、AI(人工知能)のみを用いて生成したものである。これらの作品は、書籍という表現媒体がいかなる創造的未来を辿るのか、私たちに深い思索を促す契機となるだろう。

---

## プロフィール (SEMBLANZAS)

### ペドロ・メイヤー (Pedro Meyer)

若き日から写真家を志したが、当時は正規の教育機関がなかったため、独学でその技術を習得した。彼のキャリアは、テクノロジーと視覚的ナラティブ(物語性)の境界を探求し続ける旅である。「グルポ・アルテ・フォトグラフィコ (Grupo Arte Fotográfico)」を設立し、第1回中南米写真コロキウムを推進。また、メキシコ写真評議会を創設した。その後、写真を専門に扱う初の実践的ウェブサイト「ZoneZero」を立ち上げ、1,500人以上の作家の作品を世に送り出した。世界初の写真CD-ROM『Fotografía para recordar (記憶のために写真を撮る)』を発表したパイオニアでもあり、回顧展『Herejías (異端)』は17カ国60以上の美術館を巡回した。ペドロ・メイヤー財団およびフォト・ムセオ・クアトロ・カミノス (Foto Museo Cuatro Caminos) の創設者でもある。2020年からは、60年にわたる画業を集成し、絶え間なく変化する時代におけるイメージ、記憶、そして生を考察する全40巻以上の書籍シリーズ「ミラマール・コレクション (Colección Miramar)」の制作に取り組んでいる。

### アレクシス・オルティス (Alexis Ortiz)

知覚、イマジナリー、記憶、テリトリー、アイデンティティ、そして時空の概念を中核に据え、私たちが現実を構築する手法に問いを投げかけるナラティブを創造するマルチディシプリナリーな視覚芸術家。その作品は、写真、ビデオアート、ビデオインスタレーション、音楽、執筆、詩など、多様な空間や形式で発表されており、人間・技術・自然の交差する領域を探求し続けている。現在は、ペドロ・メイヤーの協力者として「ミラマール・コレクション」のエディトリアルデザインおよび編集を担当するほか、ガレリア・ペドロ・メイヤーにおいてキュレーションと展示構成(ミューゼオグラフィ)を手掛けている。

## ミラマール・コレクション:既刊一覧 (Colección Miramar: Otros títulos)

『石油の影で』 (A la sombra del petróleo)  
『アルゴリズム』 (Algoritmos)  
『自画像』 (Autorretratos)  
『アバンダロ』 (Avándaro)  
『コロニア・アフスコ』 (Colonia Ajusco)  
『キューバ:第1巻・第2巻』 (Cuba, tomos I y II)  
『ここから、その先へ』 (Del aquí al más allá)  
『1968年の記憶』 (Durante el 68)  
『ユニバーサル・シアター』 (El Teatro Universal)  
『忘れないための写真』 (Fotografía para recordar)  
『ウエフトラ、そして村々』 (Huejutla y otros pueblos)  
『ラ・ミシュテカ』 (La Mixteca)  
『ラス・トルチャス、シウダー・ラサロ・カルデナス』 (Las Truchas, Ciudad Lázaro Cárdenas)  
『サンディニスタの証言:第1巻・第2巻』 (Testimonios sandinistas, tomos I y II)  
『あるエクアドル:第1巻・第2巻』 (Un Ecuador, tomos I y II)  
『ビルヒリオ』 (Virgilio)  
『アメリカのパラドックス — ユマ』 (Paradoja Americana - Yuma)  
他、23タイトルを現在制作中。

(Y 23 más en proceso)

---

ミラマール・コレクションの各タイトルに関する詳細は、こちらのQRコードをスキャンしてご覧ください。

<https://pedromeyer.com/es/miramar/>

本コレクションの制作にあたり、多大なるご協力をいただいた皆様に心より感謝申し上げます。



## 著者ノート (NOTAS DEL AUTOR)

ここでひとつ、お断りしておきたいことがあります。本書に含まれるいかなる誤字や脱字も、すべて私個人の責任に帰するものです。私には、あらゆる過ちを完璧に防ぐ術がないことを自覚していますが、これらの本を世に送り出したいという熱意は、失敗を恐れる気持ちを上回りました。親愛なる読者の皆様には、「完璧さ」と「なし得る限りの最善の試み」との間にある、この繊細なバランスについて、何卒ご理解をいただけますと幸いです。

ペドロ・メイヤー財団 (Fundación Pedro Meyer, A.C.) は、著作権およびコピーライトの保護を支持しています。これらは創造性を刺激し、思想や知識の多様性を守り、表現の自由を促進し、そして活気ある文化を育むものです。

本書の正規版をご購入いただき、また著作権法を遵守してくださることに感謝いたします。そうした皆様の行動が、著者やクリエイターへの支援となり、当財団が文化的な活動を継続していくための大きな支えとなります。

なお、本書に掲載されている写真の大部分は、ペドロ・メイヤーの著作物です。

本書は2026年3月、メキシコ合衆国オアハカ州サンタ・マリア・デル・トゥレ  
Repro.Gráfica, S.C. の工房にて印刷を完了した。

© 『イシュトリルコ・エル・グランデ』 ペドロ・メイヤー  
2026年2月 初版第1刷発行

本エディションは、クラシック・シリーズ (シリアルナンバー入り) 200部、ギャラリー・シリーズ50部、コレクター・シリーズ50部で構成されています。

エディション番号: \_\_\_\_\_



PEDRO MEYER